

# 現代青少年の文化と意識(2)恋愛関係の諸相

日本女子大学 木村絵里子

## 1 目的

本報告は、若年層(16～29 歳・未婚者)における社会的カテゴリーごとの恋愛観・恋愛行動の相違を明らかにすることを目的とする。00 年代後半から恋愛や性行動に消極的な青年男性を指す「草食男子」・「草食系男子」という表現がメディアを中心に用いられているように、若年層の恋愛意識・行動における消極性が注目されている。高橋(2010)によれば「草食系男子」とは、異性に無縁ではないが恋愛や性行動に積極的ではないという特徴をもち、時系列データによる分析結果においてもその傾向がおおむね支持されるという。さらに、1993 年以降、増加傾向にあった高校生・大学生女子のデート経験率や性交経験率が 2011 年には減少に転じており(第 7 回「青少年の性行動全国調査」2011)、2010 年の「第 14 回出生動向基本調査 独身者調査」でも異性の交際相手をもたない未婚者(18～34 歳)の割合が男女ともに増加している。したがって恋愛や性行動における変容は男性に限ってみられるものではない。そして若年層においては恋愛行動の活発な層と不活発な層との二極化が進んでいると指摘される。

## 2 方法

以上のような調査結果を踏まえ、2012 年調査(青少年研究会)では恋愛に対する消極性を捉えるための質問項目を新たに設定した。本報告では、これらの項目を主に扱いながら消極性の位相について探索的に捉えていく。加えて恋愛に関する意識・経験は、社会環境の違いや加齢による影響を大きく受けることから、高校生、大学生、有職者という社会的カテゴリーに分けた上で、各カテゴリーの恋愛観・行動の相違(または共通性)について検討する。

## 3 結果

全体的な恋愛交際率や交際経験率は、この二十年間、若干の増減があるもののそれほど大きな変化はみられない(青少年研究会 1992 年・2002 年調査との比較)。ただし、恋愛に対する意識としては、交際未経験者で「恋愛交際は疲れると思う」が 32.5%、「友だちがいれば、恋愛交際しなくてもよい」は 26.9%の肯定率である。さらに、交際経験のある者では「恋愛はお金がかかると思う」が 36.0%、「恋愛より勉強や仕事を優先している」は 30.1%の肯定率となっており、当初の予想に反して、交際経験の有／無に関わらずこれらのネガティブな意識が確認された。ここに「恋愛至上主義」のような恋愛を至高のものとする価値基準に変化が生じていることをうかがい知ることができる。したがってこのような傾向を「恋愛不活発層」のみにみられる特性としてではなく、それ以外の層をも巻き込んだ恋愛行動様式に伴う困難として捉え直していく必要があるだろう。当日の報告では、社会的カテゴリー(高校生、大学生、有職者)ごとの恋愛交際経験と、属性(性別、暮らし向き、親学歴)、自己評価、友人・親子関係の充実度、コミュニケーション・スキル、文化的行動との関連を検討し、この困難についてより詳細な考察を試みたい。

## 文献

国立社会保障・人口問題研究所(2011)「第 14 回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要」([http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/doukou14\\_s.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp))  
日本性教育協会(2012)「青少年の性行動 わが国の中学生・高校生・大学生に関する第 7 回調査報告」  
高橋征仁(2010)「統計でみる<草食系男子>の虚実—欲望の時代からリスクの時代へ」『現代性教育研究 月報』28(1)